

魔界都市
ブルース

長編超伝奇小説

菊地秀行

夜叉姫伝 2

やしやき

NON NOVEL





NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一ヵ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に「否定」を發し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説フィクションを通して、新しい価値を探っていきたい。小説の「おもしろさ」とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されていくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい「おもしろさ」発見の営みに全力を傾けます。

ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL-303

魔界都市ブルース 夜叉姫伝 2

平成元年10月25日

初版第1刷発行

著者 菊地秀行

発行者 伊賀弘三良

発行所 祥伝社

〒101 東京都千代田区神田神保町 3-6-5

九段尚学ビル

☎ 03 (265) 2081 (営業)

☎ 03 (265) 2080 (編集)

印刷 萩原印刷

製本 明泉堂

万一、落丁・乱丁がありました場合は、おとりかえします。Printed in Japan.

ISBN4-396-20303-9 C0293

©Hideyuki Kikuchi, 1989

スーパー
長編超伝奇小説
魔界都市ブルース

米地秀行
夜叉姫伝2



NON NOVEL

祥伝社

目次

1章 美鬼妖愛

2章 爬虫屋敷はちゆうし

3章 吸血女悲哀譜

4章 魔人変形へんぎまう

5章 迎撃留置場

6章 夜香園やこう

あとがき

210

177

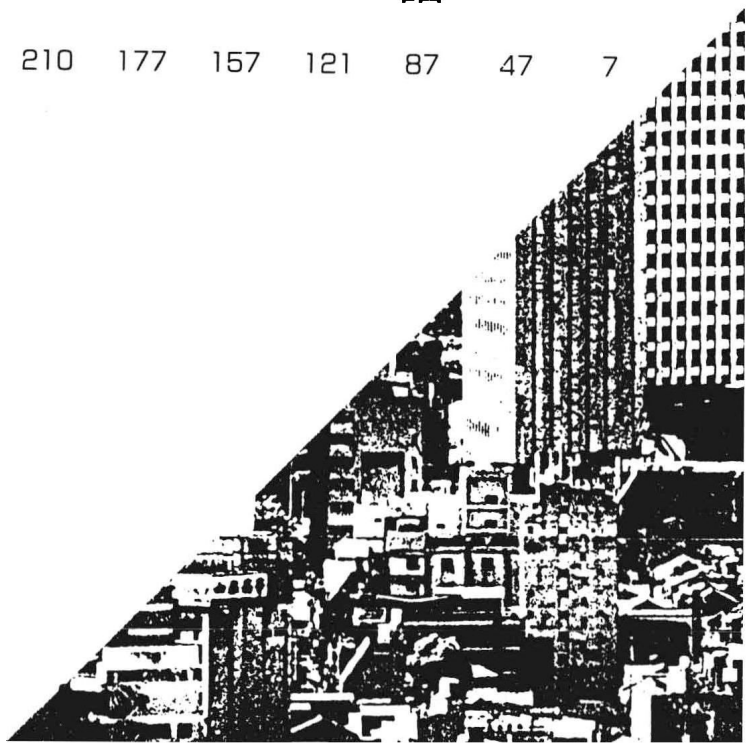
157

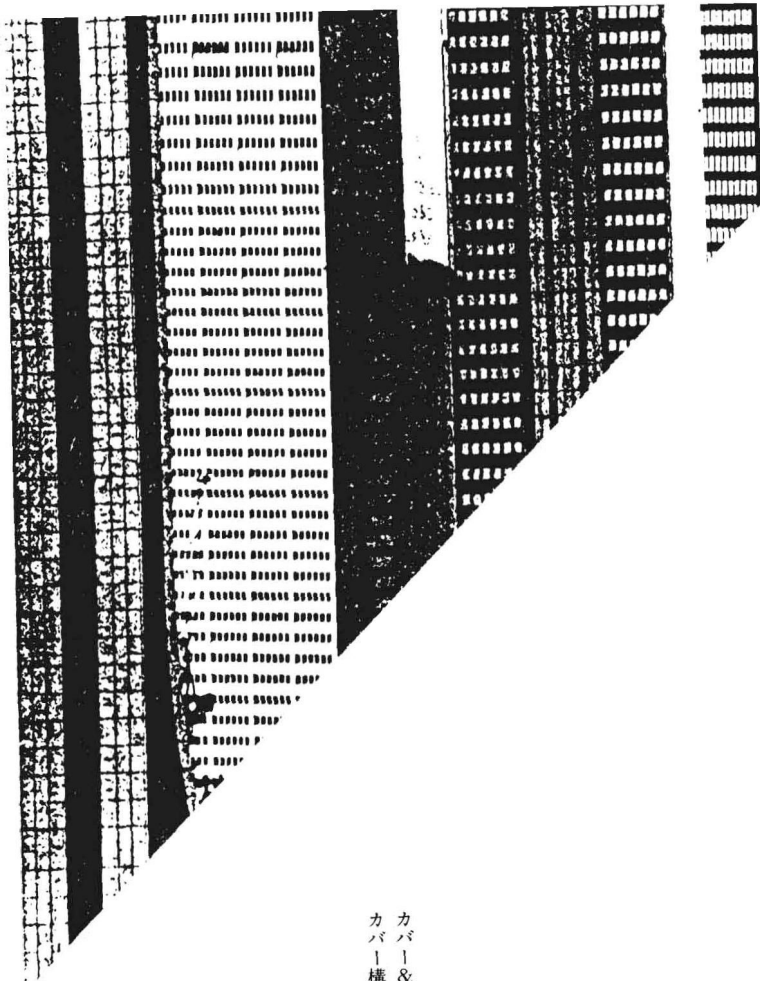
121

87

47

7





カパー&本文イラスト・末弥
カパー構成・EE 大林真理子
純

〈物語に登場する主な人物〉

秋 せつら……〈魔界都市〉でせんべい屋兼人捜し

センターを営む美麗の魔人。千分の
一ミクロンの妖糸を操り敵を倒す。

メフィフト……死人をも甦よみがえらせる、恐るべき美貌
の魔界医師。

姫 ……安住の地を求め、四千年の時空をさ
まよう中国の吸血美姫。

騏 鬼 翁 ……姫に仕え、〈新宿〉制覇の野望を抱く
奇怪な老妖術師。

秀 蘭 ……姫に付き従い吸血人形を操る妖女。
劉 貴 ……妖琴「静夜」を爪弾き、姫に従う吸血
鬼。魔気功を駆使する。

華 南 高子 ……中国古代史専攻の女子大生。夏の姫

夜 香 ……〈魔界都市〉の戸山住宅を棲家とする
妃に憑かれ、事件に巻き込まれる。

吸血鬼で、姫に斃たおされた「長老」の孫。

「夜叉姫伝一」のあらすじ

四人の中国人が〈魔界都市〉に現われた夜、新宿の
住人が吸血鬼に襲われるという事件が続発。被害者
はメフィスト病院に保護された。だが、吸血鬼は鉄
壁の警護を破り、病院に侵入し、秋せつらとメフィ
ストに対しても朱い牙を剝いた。

これが〈魔界都市〉を血の色に染める凄絶な闘いの
始まりであった。四人の中国人はこの街を支配する
ために、四千年の時空を超えて来た吸血鬼たちであ
った。姫に付き従うは、騏鬼翁、秀蘭、劉貴であ
った。

不死身の敵に対し、せつら・メフィストは戸山住
宅に棲む吸血鬼一族の「長老」とその孫夜香を味方に
つけた。だが、せつらは劉貴の魔気功によって重傷
を負い、「長老」は「姫」によって斃された。そして、メ
フィスト病院に入院中のせつらと、それを介護する
女子大生華南高子の許に「姫」の魔手が迫っていた。

1章

美鬼妖愛

「秋せつらだの?」

暗い地の底から湧き出るような、暗黒すらわななきそ
うな歓喜と憎悪の声であった。

「あ……あなたは……?」

凄まじい恐怖に串刺しにされ、華南高子は、声さえ自
分のものではないような気がした。

女は一瞥も与えず、せつらのベッドへ近づきかけた
が、急に足を止め、

「おまえは、せつらの妾か?」

と訊いた。

戦慄に身の内を蝕まれながら、高子は、半ば夢見るよ
うに酔っていた。

女の声と半顔の美貌のせいであった。焼け爛れた半分
があまりに醜悪だけに、その美しさは妖異の域まで高
まり、見るものは恐怖しながら喪神することもできな

い。

「答えずともよい。付き添いの看護人でもないのここ
にいる以上、友か身内のものであろう。まず、おまえか
らわたしの下僕に変えてくれようか」

すでに死人の表情と変わっている高子の反応を確かめ
るように女は沈黙し、

「安堵するがいい。わたしは下賤のものを身近には置か
ぬ。かといって、騏鬼翁ほど選り好みもせぬがな。おま
えはベッドの男の最期を見届ける役が似合いじゃ。――
しかし」

女は眼の高さに両手を掲げた。

悩ましい白い肌、うっすらと桜色の筋が何条も走っ
ている。

「首にも足にもある。そして、まだ治らん。魏の趙雲子
龍の剣だとして、このような深傷を負わせたことはないも
のを。――なるほど、騏鬼翁が恐れ、劉貴が目的を遂げ
ずして敗退するだけのことはある」

高子には、それがせつらの張った「護衛糸」の仕業と

はわからない。

近づくものを絡め取り、立ち止まらねば容赦なく切断するそれを、平然とちぎってやって来た美女の恐ろしさもわからない。

「だが、無駄であったな。その美しさに免じて、顔形はそのまま死なせてくれる」

いつの間にか、女はベッドの脇——せつらの顔のあたりに立っていた。

ゆっくりと両手が下りて行った。

白い指先の貝のような爪は、その周囲も先端も妖刀のごとく研ぎ澄まされていた。

昏睡状態のせつらに、もはや、為す術はない。

手が喉にかかった。

声を出そうと意識しながら、高子の喉は膠のごとく接着されていた。

見ているしかなかった。

女の手が力が入る。

それが、引き離るようにながら離れた。

指は小刻みに震えていた。

爪がせつらの頸に触れた。肉が窪んだ。

高子は眼に入るものすべてに意識を集中しようとした。

自分にこの女をどうにかできるとは思えない。救いが必要だった。ふたつある。せつらの枕元の非常ベルと、自分の襟につけた超小型マイクだ。枕元には女がいる。つまり、ひとつしかない。超小型マイクを作動させるには、マニュアル・スイッチを押すか、キー・ワードを口にすればいい。——だが、手は動かさず、声も出ない。

高子は両足底に意識を移した。「気」の力——精神安定法に賭けるのだ。

恐ろしいほど緩慢に、生あたたかいものが足の裏から上昇して来る。しかし、全身へみなぎるまでの時間は？ それより確実なことがあった。

その間に、女は百回もせつらを殺してしまいうだろう。

白い手が、頸から左右に分かれた。

高子の胸に小さな痛みが疾る。驚愕のせいであった。

女はせつらの頬を撫でてゐる。

愛しい子を見つめる慈母のように。

「美しい男」

その言葉と響きを、高子は信じられなかった。

「なんとという美しい男……このわたしをも狂わせるほどに」

声は冬の狹霧のごとく室内を揺曳した。

手の下で、せつらの頬が歪み、鼻が震えた。唇もわなないた。

ああ、女吸血鬼は愛撫しているのだ。

異界の情念を込め、せつらのすべてを掌の記憶に刻み込もうと。

おぞまじさが高子の全身を貫いた。

足首に留まる「気」へ、上昇の一念を込めて放った。

上がって来る。膝へ、太腿へ。

「だが……おまえは死なねばならぬ。生きておれば恐るべき敵となり、死なずに死ねば、わたしの胸を波立たせずにはおくまい。わたしには、そんな自分が許せぬの

だ」

急速に女は手を引いた。精神の動きが表われた素早さだった。

眉が逆立ち、唇がめくれた。精神が変貌を促すというならば、女の精神は血に飢えた悪鬼そのものであった。

高子には、照明すら暗黒に閉ざされたような気がした。

「気」は丹田に達している。ここから背骨を通して全身へ循環させるのだ。

絶望が高子を捉えた。

後ろ姿しか見えぬ女の全身が、眼も覆うばかりの妖気を放ったのだ。

顔が躍った。

せつらの喉元へ。

恐怖と絶望が「気」の循環を強制した。

高子の手がマイクに伸び、声がキイ・ワードを叫ぶ。女が上体を起こした。

高子の眼は真っ先にせつらの喉へ吸いついた。

出血はない。陶器のような肌は呪われた傷に汚されて
いない。

異変が生じたのだ。

高子の表情は恍惚と溶け崩れた。

女の顔も、また。

それは、何らかの方法で敵の正体を女と知ったせつらの
精神が可能にした「防御法」だったろうか。

高子には、せつらの顔がかがやいて見えた。

女にも。

美しさというものの窮極を極めれば、それは、あらゆる
精神を服従させるものであろう。

哲学、宗教、倫理——抛りどころのすべてを喪った人
間の精神は、ただ、その美しさに眼を見張り、恍惚とな
るしかない。

吸血鬼の柩を護る下僕のように。

眼に見えぬ美の呪縛に逆らいつつ、女は右手を自分の
顔に近づけた。

「今宵は——」

引き摺るような、無念の、そして快樂の呻きであつ
た。

「今宵は、わたしにとって、生涯最大の厄日と見える。

……だが……やわか数十年の生命に敗れはせぬぞ。……
見よ！」

言うなり、女の手は両眼を横に薙いだ。

血の霧が煙った。

なんという女か。——せつらの美の呪縛からわが身を
解放するために、女は両の眼を引き切ったのである。

その刹那、高子は全身の妖気が緩んだことを知った。

知ってなお棒立ちのその手首を、ぐい、と血まみれの
指が握りしめた。眼の前で、身の毛もよだつ顔が、にい
と笑った。

焼け爛れた半顔に、両眼の傷からこぼれる血潮が滴
り、ふた眼とは見られない。そのくせ、残された、これ
も朱に染まった美貌の神々しさは、さらに妖しく際立っ
て、高子の魂を奪った。

「本来ならば、おまえに用はない」

女の口の端に鮮血が流れ込んだ。

「だが、わたしはもう、この街の敵を見くびらぬ。お、病院のものが来たようじゃな。——おまえがせつらの縁者である以上、彼奴を無限地獄に落とし込む役に立ってもらおうとしよう」

もう一方の手が、冷たい機械の指のごとく高子の顎を上向け、凄愴な顔が左の首筋に重なった。

恐怖も苦痛もなかった。かすかな痛み——その後で、生ぬるい涙のようなものが首筋から体内へ広がって行く。

淡い哀しみが、高子の胸をかすめた。幼いとき、浅草の雑踏で両親とはぐれたときの感情に似ていた。

女が顔を離れた。ドアが開いて、警備員たちが駆け込んで来る。

右手の麻痺銃を向けながら、茫然と立ちすくんだのは、血まみれの女を敵と判断し得なかったのと、ひたすら凄まじい表情の故だ。

それも一瞬のこと——

「動くな！」

「抵抗すれば射つ」

口々に叫ぶ三人の声に、

「退がれ」

凜然たる命が飛んだ。女の叱咤であった。

生まれついでての気品と威厳と、妖々たる鬼気すら超えた何かに打たれ、三人のガードマンは思わず数歩退がった。

われに返ったひとり麻痺銃の引き金を引こうとした刹那、彼らの間を白い影が風を巻いて走り、三人の喉は思うさま鮮血をぶちまけていた。

眼がつぶれても、この妖女には何らかの超感覚でものを知ることができらしかかった。

高子が通報した瞬間から、病室の様子は警備室のモニターに映じている。

いま、係員は眼を剝いた。それまで彼には、ベッドのせつらと立ちすくむ娘の姿しか見えなかった。三人を派遣したのは、何とはなしに、その光景に不気味なものを

感じたからである。

しかし、娘が身を強張らせ、眼に見えぬ何かを抱きすくめられたような姿勢をとったばかりか、駆けつけた三名のガードが明らかに娘以外の何かを認めて棒立ちとなり、次の瞬間、喉笛から鮮血を噴出するに及んで、係員は「第一級警報」を発令した。

「機動服」に身を固めた武装警備員が病室へ急行する一方、各階の要所を戦車の突進すら撥ね返す力場が遮断し、天井から壁から、大出力麻酔銃と麻酔ガスのシャワーがノズルをのぞかせる。常時閉鎖中の「倉庫」では、禁断の兵器とされる「神経破壊砲」「遺伝子攪乱装置」が、超小型原子炉のエネルギー供給を受けているはずだ。

これら超科学防衛線を突破されれば、あとは病院の上層部しか作動させ得ぬ「超心理防衛網」が、そして、院長以外は理解もできぬ「心靈最終防衛圏」が、敵の訪れを待ち受ける。

備えは万全であった。

だが、――

メフィスト病院最大の惨劇は、そのさなかで生じた。武装警備員の「機動服」は、ソーラー核炉から供給される一〇〇〇馬力のエネルギーを動力源とし、一二〇ミリ対戦車滑腔砲の直撃にも耐え得る一〇ミリHGシリコン複合装甲が防衛を担当する。装甲内に組み込まれた麻痺銃、レーザー・シャワー、スティック・ミサイルは、どれひとつとっても、監視庁自慢の「機動警官」三個分隊と互角に渡り合える「兵器」だ。

警備室での装着時間二秒を経たのち、秋せつらの病室へ急行した一〇名の彼らは、非常用エレベーターを降りたところで、廊下をやって来た美女と遭遇した。信じられなかった。

廊下に仕込まれた麻痺銃は、マッコウクジラさえ千分の一秒で眠らせる神経麻痺線を、その千頭分も女性に染み込ませているはずであった。

隊長を先頭に、二、三、四名と扇型に開いた一同を前にしても、女の歩みは止まらなかつた。

その凄まじい形相、その美しさ。

原初の記憶から湧き上がる混沌に男たちの精神は乱れ、右手に巻かれた代謝測定器の指示により、安定剤二ミリグラムが血管に投与された。

「止まれ」

と、隊長が命じた。

女は直進した。

「第二防衛団まで麻痺銃使用。効果なしの場合、第三、第四団はレーザーを使用せよ」

——以上の内容を百分の一秒の圧縮信号で全員に叩き込み、隊長は麻痺銃の照準を女の胸部に合わせた。

無色無臭の超音波シャワーが全身を包む。

女が手を伸ばした。

恐怖と薬による安定感の混合が、後退しようとする隊長の意識を遅延させた。

女の手が装甲の胸を押した。

空気でもものけるような、たおやかな動きと速度だった。

総重量一トンの機動服を宙へ舞わすのに、どれほどの力が必要だろうか。

隊長の身体は、背後のひとりにぶつかり、そいつもろとも、むしろスローモーともいえる動きで、第三防衛団のラインへ突っ込んだ。

その後を追って、女は防衛線を突破して行く。

四方から真紅の光条が肢体を買った。瞬時にダイヤモンドも溶解する一万度の高熱は、女の白い肌に赤点をつけることもできなかった。

懐かしい、モーター音を上げて、最終防衛団の二人が前後から女の肩と胸を押さえた。

後方へ跳ぶのと肩をひねるのを、女は同時に行なった。白い蝶の舞いに似ていた。

装甲腕はすべて肩の付け根からちぎれた。中味を収めたまま。

警備員の身体が不自然にかすんだ。モーターの唸りが廊下を支配する。血煙が渦巻いた。機動服の運動系が暴走を起こしたのだ。超震動現象——このままぶれがつつ

けば、機動服は人体もろとも分解してしまふ。

通常の場合は、内蔵された医療センターが本体の治療を行ない、破壊部位の程度に応じて、メカニズムの作動を制限する。外部にトラブルを及ぼす可能性があれば、それが千分の一パーセントでも核炉はエネルギー供給停止を命じるのだ。

あり得ない現象は、女の織手が触れたせいだろうか。

「制御不能だ！」

片腕をもぎ取られた隊員が叫んだ。

「おれたちごと、破壊しろ！」

両肩から血の霧を撒きつつ、もうひとりも相和す。

残りの隊員はすぐさま決断した。

三名がぶれつつける二人の背後へ廻って、制御中枢回路へレーザーを照射する。

命中箇所から電磁波が亀裂のように伸び、モーターの巡回音が急速に緩やかになると同時に、輪郭を露にした機動服は、やや前屈みで静止した。

「女はどうした？」

同僚を射殺した警備員が女のいた方を見て、怒鳴るように訊いた。

「奥だ」

答えた男たちは、壁に張りついていた。

「おれたちの頭上を越えて行った。空を飛べるんだ。そして、おれの方を向いた。……もう、もう、おれは駄目だ、一生、眠れない。あの——あの顔を見たら……」

「そんな寝言を言っている場合か!? ——どうせ、防衛線に引っ掛かる。追いかけるぞ! ——隊長!？」

「動きが取れん!」

と、床の上で支えに廻った二名の部下もろともぶっ倒れたきりの隊長が呻いた。

「核炉の出力が停止している。服も脱げないんだ。指揮はおまえにまかせ。行け、上原」

「了解!」

音もなく、自重一トンの男たちは走り去った。

都合四名。——〇名中、残る二名は死亡し、三名は行動不能。そして、壁に張りついた最後のひとり、右